

# 笠井町下組遺跡

—— 静岡県浜松市 笠井町下組遺跡 緊急発掘調査報告書 ——

浜松市笠井町281番地、金田丁場跡地において、宅地造成計画があり、盛土整地される宅地部分を除く取付道路建設予定地で遺跡が及ぶ範囲について、緊急発掘を実施した。調査の費用は、開発者である知立土地株式会社が直接負担した。

試掘調査期間 1994年10月4日（1日間）。

調査担当 川江秀孝・辰巳均（浜松市博物館）。

発掘調査期間 1994年12月15日、12月16日（2日間）。

調査担当 川江秀孝・辰巳均・太田好治（浜松市博物館）。

調査面積 約180m<sup>2</sup>。

1995. 3

浜松市教育委員会



第1図 調査範囲位置図

平成4年発行の浜松市全域図を使用。開発対象地周辺にも遺跡は及んでいる。

## 1. 笠井町下組遺跡の概要

笠井町下組（しもぐみ）遺跡は、現浜松市北東部、天竜川下流に形成された沖積平野右岸に位置する。浜松市博物館が笠井地区で実施した寺院関連調査で、養円寺境内において土器の散布を確認したことから登録された。笠井町中心部は早くから市街化が進み、遺跡の有無も長く不明であったが、この時の調査で数カ所の遺跡が発見されている。養円寺境内を中心とする遺跡は、その所在する小字をとて「下組」と命名された。

笠井地区において、古くから確認されていた遺跡や、最近確認された遺跡等を、比較的旧地形を表現した地図上に示した（第2図、右頁）。豊町に所在する蛭子森古墳は、1962年に発掘調査された（文献1）。片袖の横穴式石室で、水鳥の装飾のついた須恵器を出土するなど特徴がある。またこの地域では、後期古墳のほとんどが群集墳として三方原台地上・磐田原台地上に築かれるのに対して、半野部に単独で存在するなど特異な例とすることができます。豊町から恒武町にかけては、古墳時代～中世の遺跡が広範囲に分布している。笠井町市街地では、宅地化のため遺跡の確認が困難であったが、前述したように、いくつかの遺跡が確かめられ、予想はされていたとおり、笠井地区全体が古くから開かれていたことを証明することになった。

第2図向かって右端を流れるのが天竜川で、地図上に表記された水田記号を丹念に追うと、天竜川の旧流路をいく筋か推定することができる。それらの網の目状の流路の間、集落や畠地（この地図では無記号の部分）が自然堤防と考えられる。多くの遺跡が立地する笠井地区は、この付近ではもっと大きい微高地と判断してよからう。また、図左下の「上石田」から「貴平」にかけては、古くから条里制地割りが指摘されている（文献2）。地図上でも道路や町村界などに、南北方向ではやや西偏する線分を確認することができる。なお、笠井市街地の中央道路やその周辺には、これと異なるほど南北方向の線分を認めることができる。犬竜川下流域において、国分寺や官衙周辺の地割りが、条里と一致せず、南北あるいは東西方向を示すという指摘もある（矢山勝氏による）ので看過できないところである。

さらに、笠井地区には浄土宗・時宗の寺院が卓越するという特色がある。中世においては、岡宗派とも、都市部を中心に教総を伸ばしたことが特徴とされる。このことは、中世の笠井地区が、都市的な様相を呈していたという傍証といえるかもしれない。

この地域には、近世において豊田郡と長上郡の境界があった。この郡界を古代にそのまま残することはできない。この地域が古代において、磐田（磐田は新設）・長田（長上）・龜玉郡のいずれに属するのか定まっていない。古代末～中世における羽島荘・美濃御厨がこの地区を含んで設定されているはずだが、その範囲も明らかではない。

## 参考文献

- 1 遠江考古学研究会 1964. 7 『蛭子森古墳』
- 2 浜松市役所 1968. 1 『浜松市史 一』
- 3 浜松市教育委員会 1976. 6 『浜松市笠井西浦遺跡調査概要』
- 4 財團法人岐阜博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所 1983. 3 『社口遺跡』
- 5 財團法人浜松市文化協会 1994. 3 『社口遺跡』



第2図 周辺旧地形と遺跡の分布

明治23年の地形図を使用。笠井地区を一つの大きな微高地ととらえることができよう。

## 2. 下組遺跡の調査の経緯と概要

再開発計画のおこった工場跡地は、養円寺北側隣接地であったため（第1図参照）、事業主と博物館が協議し、事業主の協力を得て試掘調査を実施した。その結果、用地西側の一部は奈良時代を中心とする明確な遺跡と認められた。また、東側のほとんどは、確実な遺跡とはいえないが、一部で小貝塚が出土し、年代は不明ながら再精査が必要と思われた。ここにおいて、両者が再び協議し、盛上造成される宅地部分を除いて、取付道路予定地について、本調査を実施することで合意した。本調査は、工場盛土と旧表土を重機によって除去し、基盤となる砂層上を人力で精査して、遺構・遺物の検出をはかった。

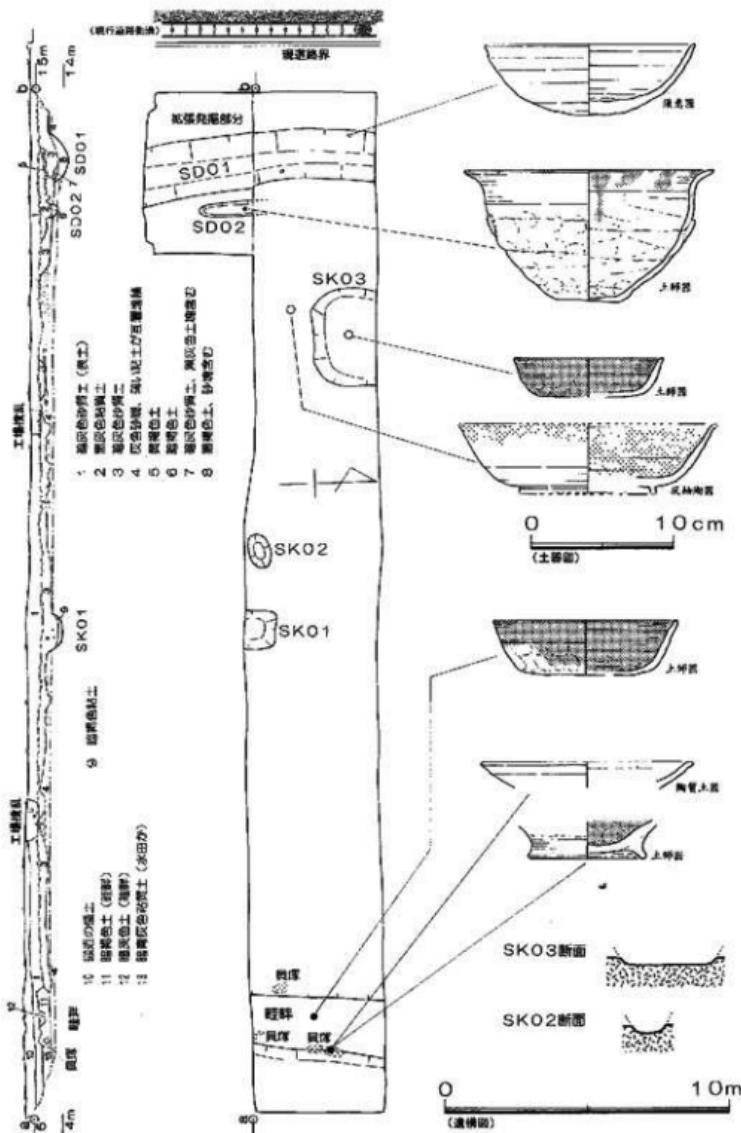
このため、調査範囲は、東西に長い平面形となった。遺跡の全体を示すのは困難である（第3図）。特筆すべきは、調査区西端で検出された溝SD01であろう。ほぼ南北方向にのびる溝のごく一部を検出しただけだが、おびただしい量の土師器・須恵器が出土した。また、その東側に平行して細長い溝SD02も一部分検出された。ほぼ完形の土師器跡が出土した。「縁内側に赤彩があり、明らかに祭祀用である。これらの溝は底部付近だけを検出したにすぎず、断面で観察する限り、幅5mほどの幅広い溝を想定したほうがよさそうである。さらに、溝の西側は基盤が高く、東側は低い。また、溝内での土器の出土量と比較して、それ以東の調査区内遺物はごくわずかである。このため、遺跡の中心は、SD01以西の調査区外にあって、SD01は、遺跡の東端を区画する溝であった可能性が高い。溝内出土遺物は、遺跡の中心から廃棄されたものであろうが、古墳時代後期のものを含み奈良時代後半までを主体とする。前述した土師器跡のほか、手づくね上器（第7図）、馬齒（写真14）など祭祀遺物が含まれる。

調査区東端近くで、水田の畦畔が検出された。南北方向に延びている模様である。調査区の大半は畑地で、畦畔から東が水山となる。明治期の地籍図によれば、この付近は畑地か宅地に表現されており、この水田の年代は江戸時代以前といえる。試掘調査で確認された貝塚は、この畦畔付近に点在しており、わずかながら陶質上器や上器の破片が検出される。確実ではないが、水山の形成時期と貝塚の堆積時期を平安時代と推定することが可能である。日はハマグリ・アサリ・ナガラミ（ダンベイキサゴ）であり（写真15）、現遠州灘海岸から10km以上離れた笠井地区に棲息することはありえない。往時の交易に求めるのが妥当であろう。

遺跡周辺は、道路等も変更されて、旧地形を求めるのも困難であるが、IH地籍図に今回の調査区を重ねて検討してみると（第4図）。SD01の位置は、円正寺から養円寺に通じる旧道の位置と一致する可能性を指摘できる。また、この旧道と笠井街道の間隔が約100m、また東西方向でも養円寺に向かう小路と小字「中組」付近の小路の間隔が100m余で、調査区を含む範囲に「方一町」の区画を想定することも一案であろう。

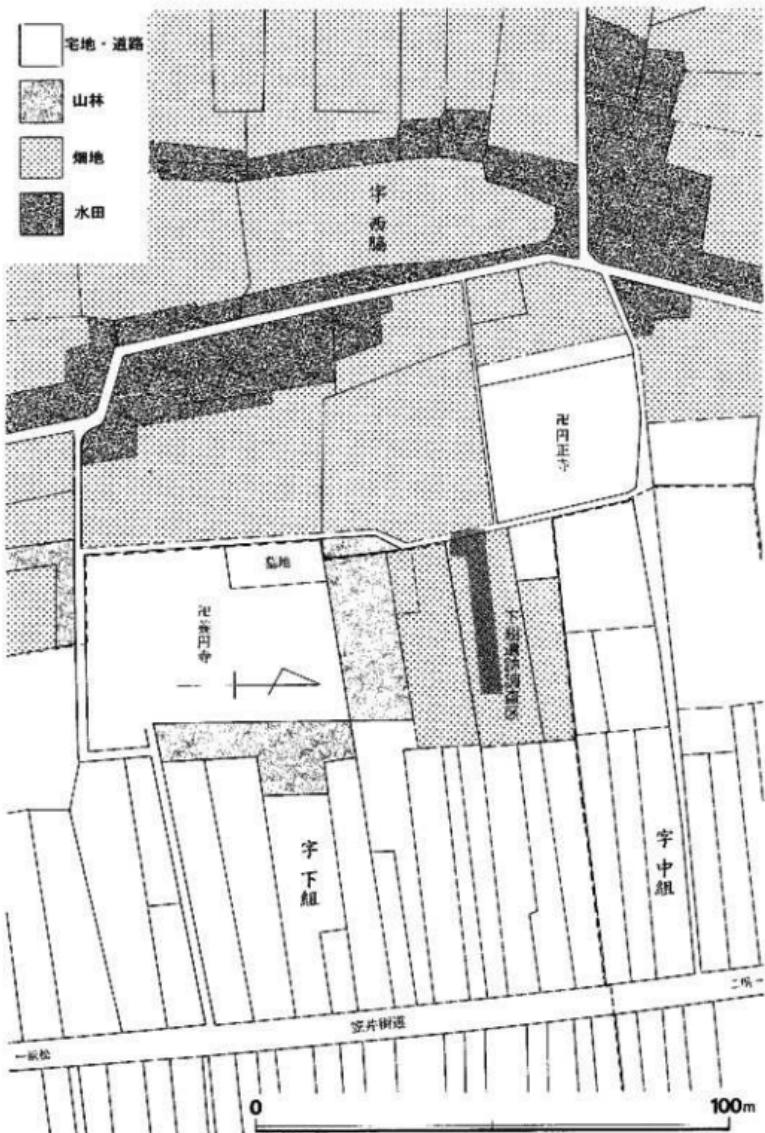
ごく限られた範囲の発掘調査から類推するのは危険ではあるが、地形・区画・郡界の位置などと、出土遺物の多様さ、祭祀遺物・赤彩土師器や暗文のある上器の存在など、当遺跡周辺に官衙的な遺跡の存在を仮定することも許されよう。今後の調査の進展に期待したい。

なお、調査結果から本遺跡の主体は字「西脇」にあると予想されるが、便宜上遺跡名は従前のとおり「下組」としておく。



第3図 調査区全体図・遺構図

調査区内出土の代表的な土器を示した。SD01内には、このほか大量の土器片がある。



第4図 旧地籍図と調査区の位置

明治22年の旧地籍図をもとに再製図。今回の調査区の位置を現行地形図と照合して重ねた。

### 3. 出土遺物と遺跡の性格

わずかな範囲の発掘であったが、SD 01を中心にして多くの遺物を得た。SD 01出土品を第6図・第7図に、それ以外の出土品を第5図に示した。

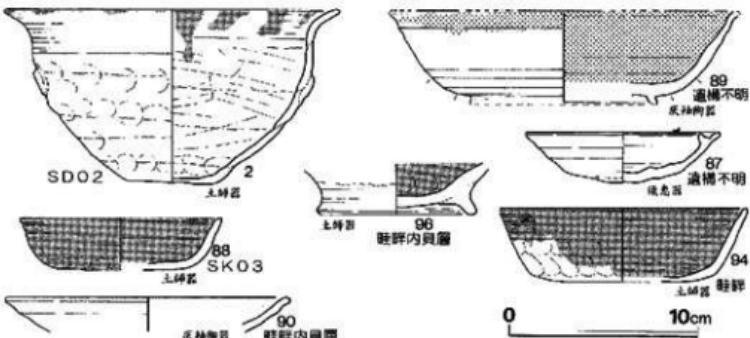
第5図2は、口縁内側に転々と赤彩を施す土師器の鉢である。耳状の把手を2カ所にもうける。明らかに祭祀用の上器であるが、墨画などは確認できなかった。同図89は、黒窯14号窯式の灰釉陶器の破片である。遺構は確認できなかった。畔群からも若干の出土品があるが、耕作土中の遺物でそのまま年代を決定できないのはよく知られているところである。しかし、畔群中の貝塚から出土した破片90、96は、畔群の年代を示す可能性が高いものと思われる。

SD 01からの出土品が大半を占める。現地では、かなりの部分まで接合・復元ができるものと予想したが、整理作業段階では、ほとんど接合がかなわなかった。調査範囲の狭さや、調査の精度も問題にしなければならないが、年代幅のある上器群であり、むしろ使用後の廃棄物であることを積極的にとらえたい。実際、第6図15・16の須恵器杯身をはじめ、使用痕を顕著に認めることができる。第7図64の赤彩土師器でも内面に使用痕がある。また、同図72の土師器のように、最終的な転用が煤の付着する姿となる例を認めなければならない。

このほか、同図51には、内底面に螺旋状の暗文もある。同図76はこしきの底部と思われる破片、48は、こしきまたは鍋の把手であろうが、内面にも赤彩がある。

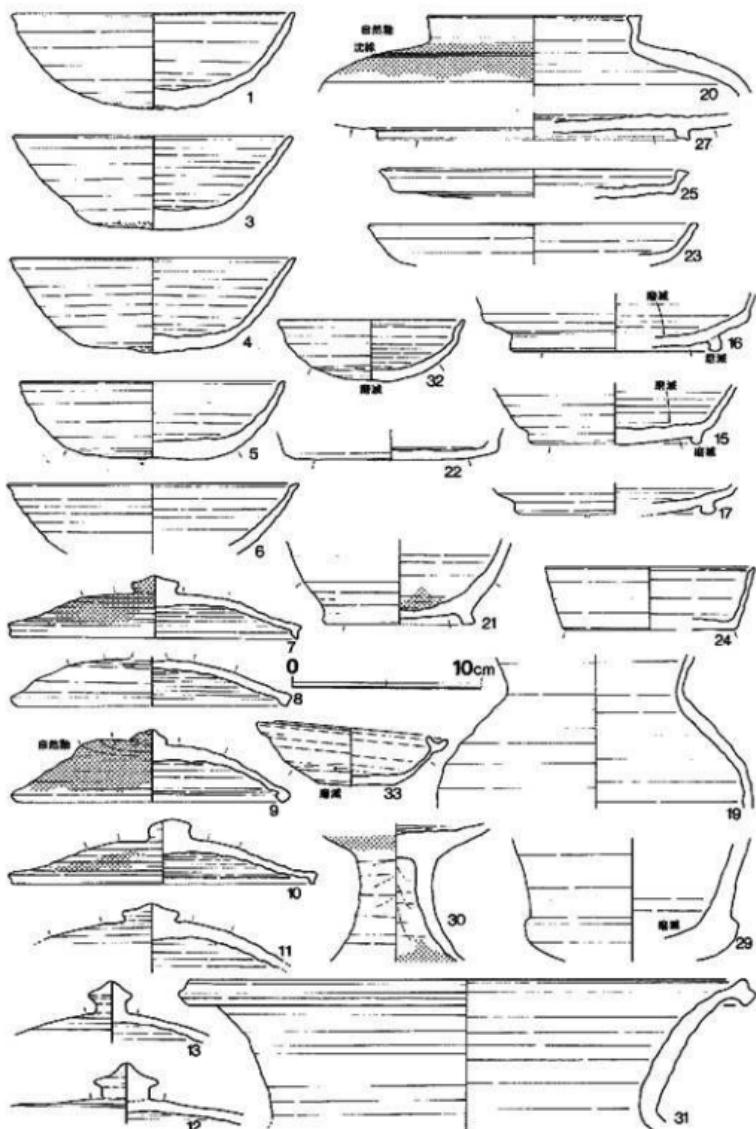
これらの遺物は奈良時代を中心とするものの、若干ながら古墳時代後期（7世紀中葉・7世紀末）のものを含み、平安時代（9～10世紀）のものもまた含んでいる。この時期の一般集落の遺物の様相は、必ずしも明らかではないが、当遺跡の遺物は、一般集落というよりは祭祀等も掌握した官衙的な要素としてとらえたほうがよいようと思われる。遺物による年代観も通常の地方官衙の継続期間に一致する。いずれにしても遺跡の中心は、調査区以西に求められる。

ただし、笠井地区には下組遺跡のほか多数の遺跡が確認されており、今後の調査の進展によって、さらに詳細な同地区的古代史を描けるものと確信している。

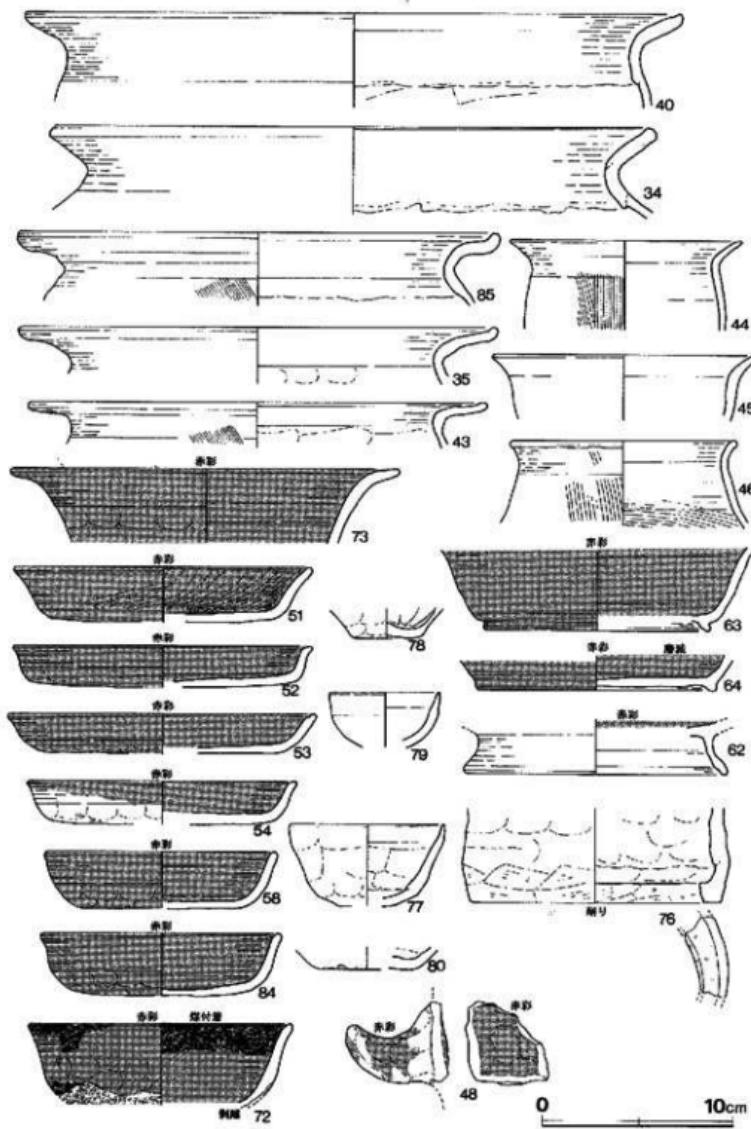


5図 出土品実測図(1)

SD 01以外のものを括して掲載した。



第6図 出土品実測図(2) SD 01出土 穀恵器・灰釉陶器  
完形品はほとんどなく、いずれも破片である。



第7図 出土品実測図(3) SD 01出上 上部器  
赤彩土師器の個体を比較的多く認めることが出来る。



写真1 調査前全景（西から）

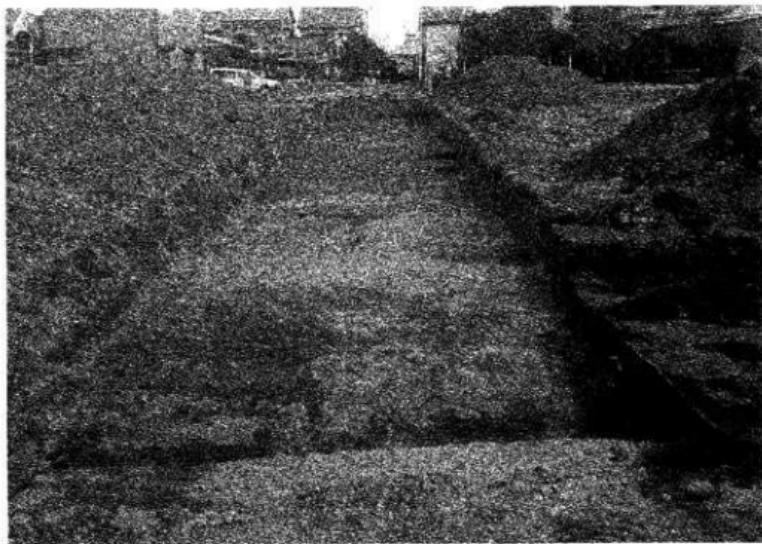


写真2 調査区全景（西から）

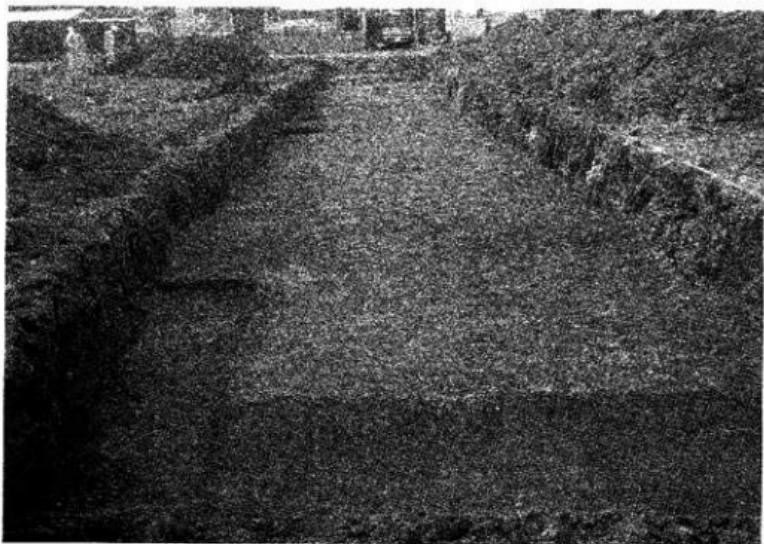


写真3 調査区全景（東から）

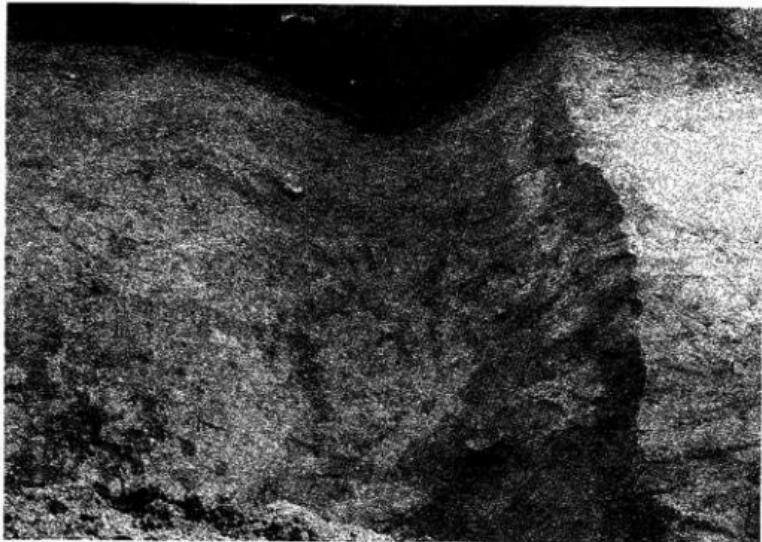


写真4 SD01

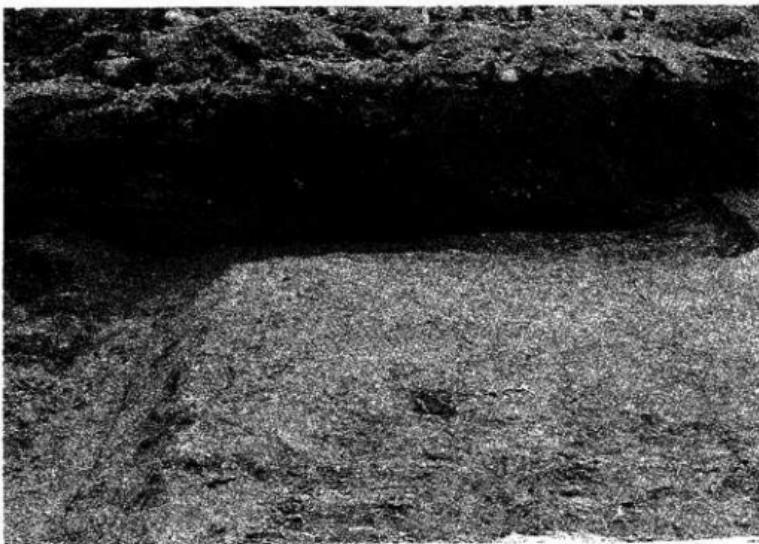


写真5 畦畔

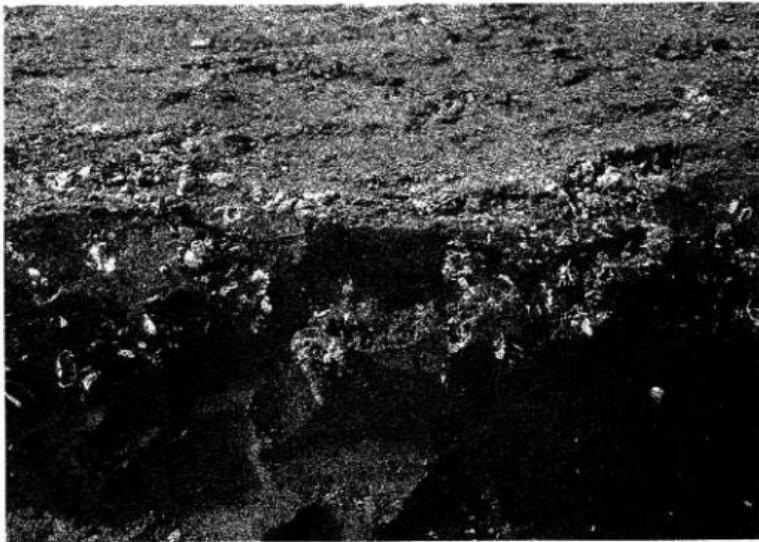


写真6 畦畔内具層出土状況

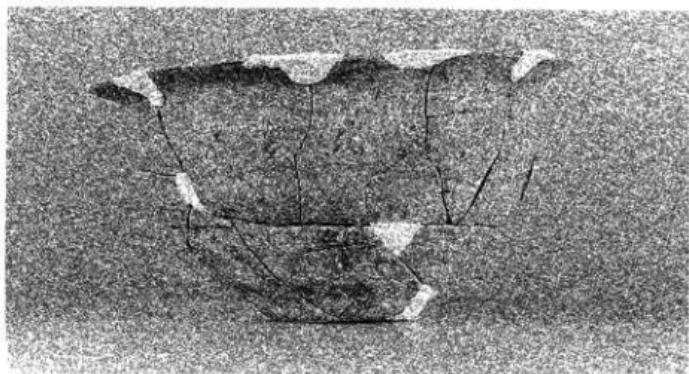


写真7 SD02出土土器 2



写真8 SD02出土土器 2

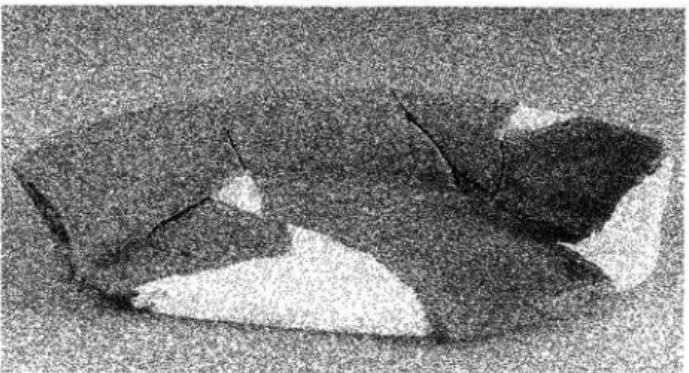


写真9 SD01出土土器 51

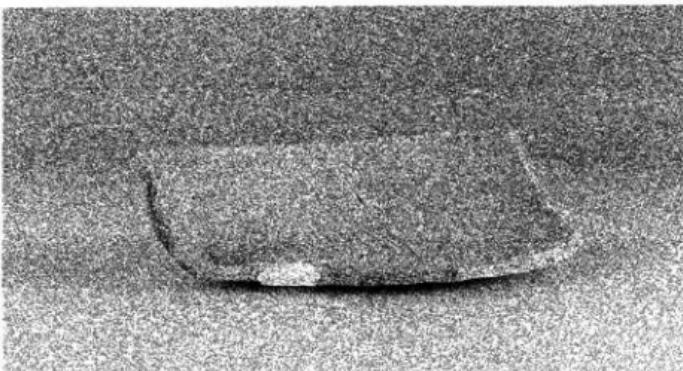


写真10 SD01出土土器 84

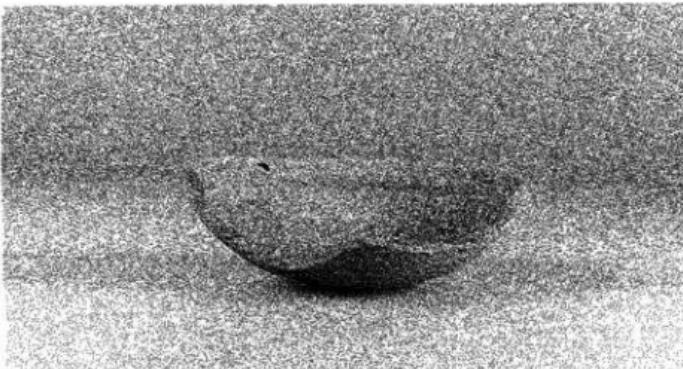


写真11 SD01出土土器 32

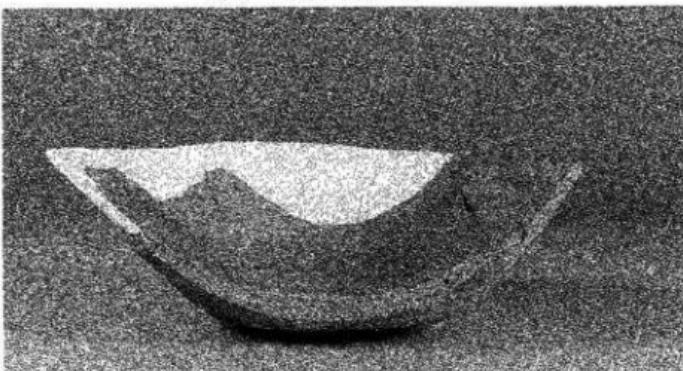


写真12 SD01出土土器 3

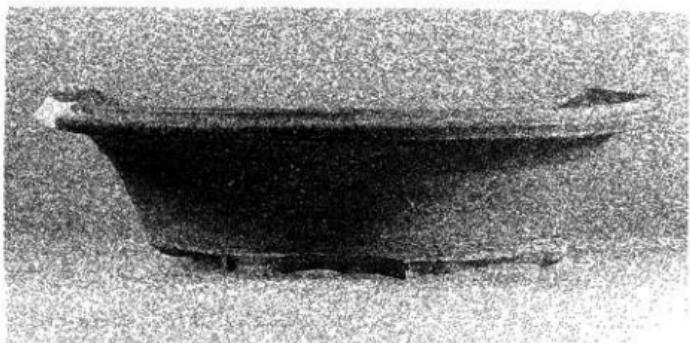


写真13 SD01出土土器 31

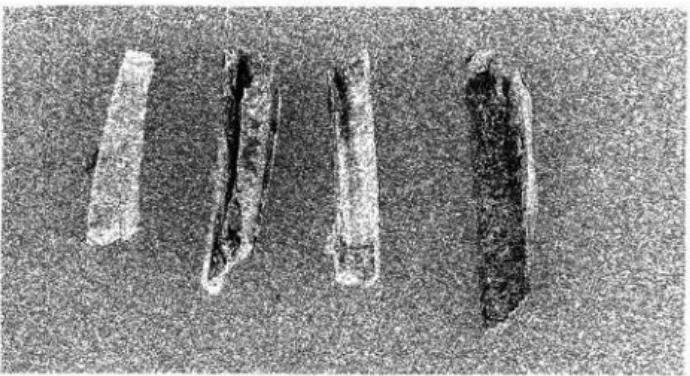


写真14 SD01出土馬歯 91



写真15 駿府出土貝殻 92

報告書抄録

書名（ふりがな）	笠井町下組遺跡（かさいちょうしもぐみいせき）
刊　書　名	静岡県浜松市　笠井町下組遺跡　緊急発掘調査報告書
編　著　者　名	太田好治
編　集　機　関	浜松市博物館　〒432　静岡県浜松市蜆塚四丁目22-1　053-456-2208
発　行　機　関	浜松市教育委員会　〒430　静岡県浜松市元城町103-2
発　行　年　月　日	西暦 1995年3月15日
所　収　遺　跡　名	笠井町下組遺跡（かさいちょうしもぐみいせき）
所　在　地	静岡県浜松市笠井町（はままつしかさいちょう）281番地
遺　跡　コ　ード	（市町村）22202　（遺跡番号）10-15
緯　度　・　経　度	（北緯）34度45分55秒　（東經）137度48分02秒
調　査　期　間　・　面　積	1994年12月15日～12月16日　約180m <sup>2</sup>
調　査　原　因	分譲宅地開発計画に先だつ緊急発掘調査。
主　な　遺　構	溝・土坑（奈良時代）、水田畦畔（平安時代？）
主　な　遺　物	須恵器・土師器・灰釉陶器・貝

笠井町下組遺跡

1995年3月15日

編集発行 浜松市教育委員会

印 刷 株式会社 開明堂